

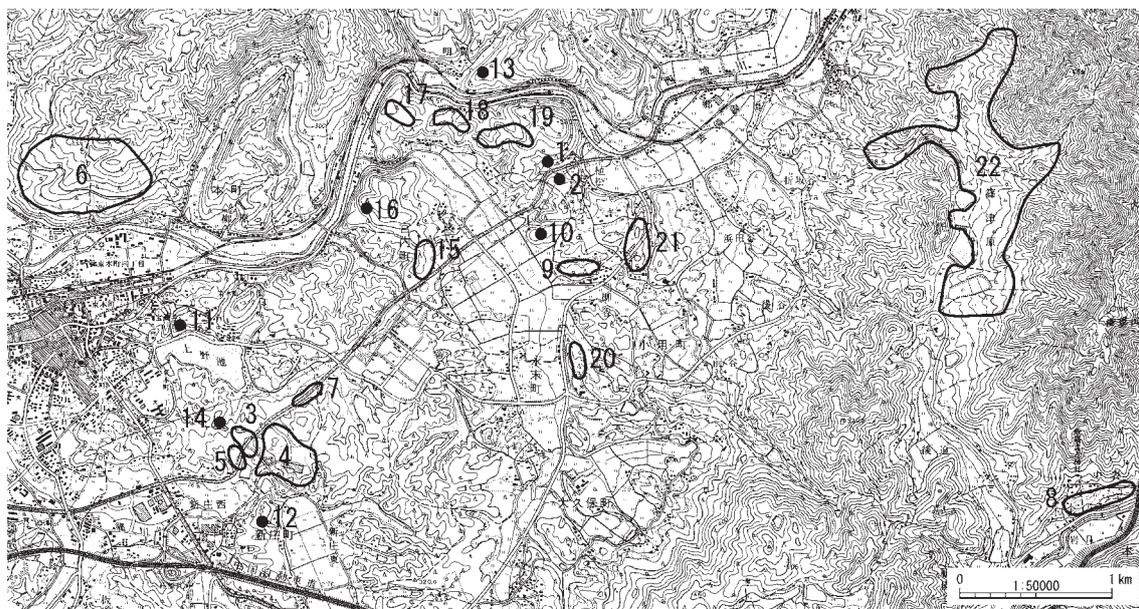
佐田峠墳墓群（第3次）の調査

野島 永・矢部 俊一

1. 位置と環境

佐田峠墳墓群は広島県庄原市宮内町佐田峠他にある。庄原市市街中心部から西城町へは国道183号線が通るが、墳墓群はこの183号線沿いに中心部から北東へ4kmほど離れた西城川左岸の低丘陵上に位置している（第1図）。佐田峠墳墓群から南西2.5kmには、弥生時代中期から後期にかけて営まれた和田原遺跡（藤田 1988、松井編 1999、稲垣編 2001、稲垣・今西編 2004他）がある。弥生時代中期中葉から後期前葉の住居跡群が調査され、精緻な文様をもつ塩町式土器が多数出土した。当該墳墓群の造営時期に併行して営まれた集落跡であり、密接な関係を持っていた可能性が高い。また、同一丘陵上に南接して佐田谷墳墓群がある。弥生時代後期初頭に造営された佐田谷1号墓は初期四隅突出型墳丘墓であり、木棺・木槨構造を埋葬施設としてもつ最古の墳丘墓であることも明らかとなっている（妹尾編 1987）。佐田谷3号墓周溝付近からは塩町式土器が出土していることから、佐田谷墳墓群も中期末葉頃から造営されていた可能性はあるものの、昨年度の年報（野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009、46・47頁）にもあるように、3号墓も含めて墳丘の形態は後期前葉に降るものと考えられる⁽¹⁾。

（野島 永）

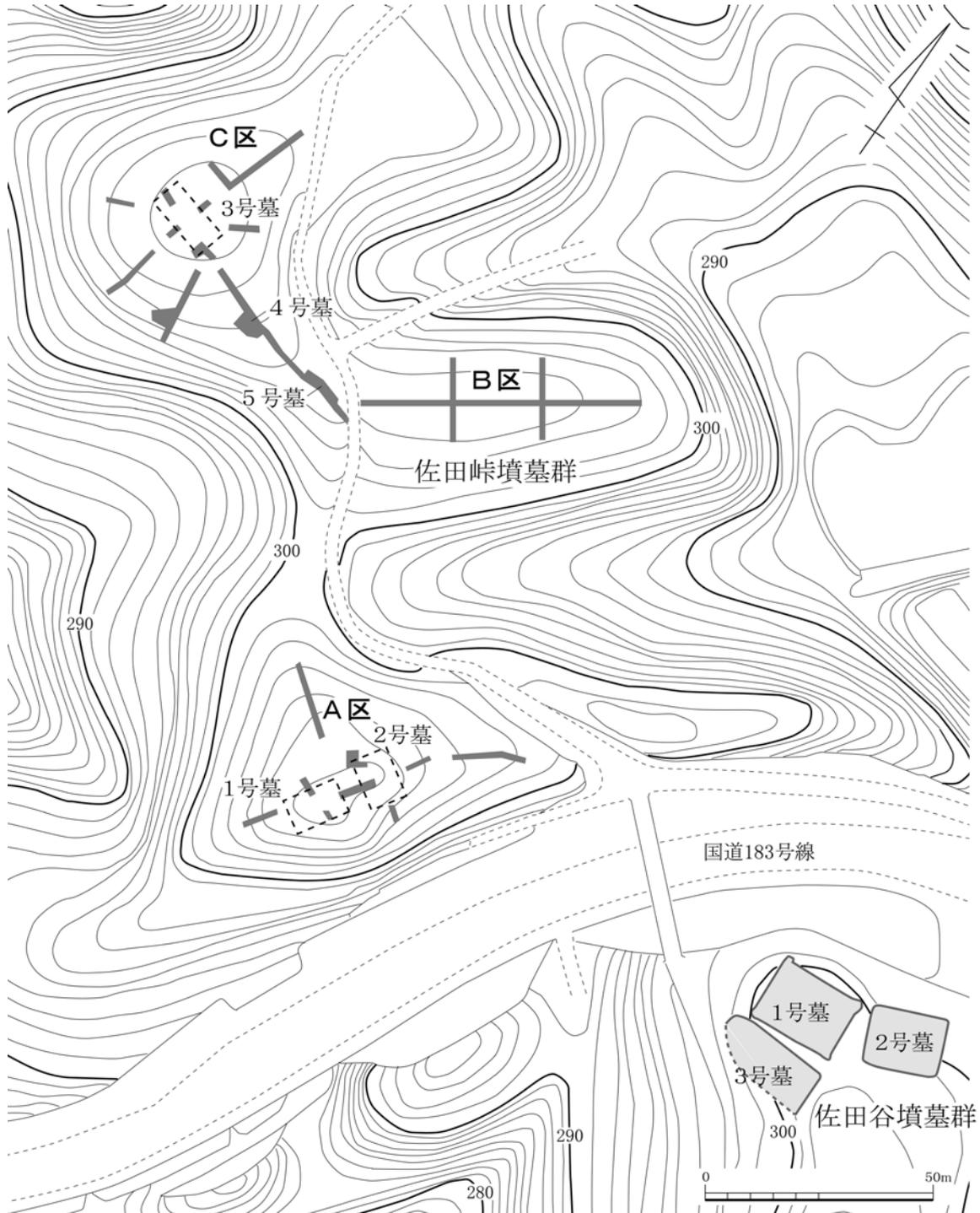


第1図 佐田峠墳墓群周辺主要遺跡分布図（1/5000）

1. 佐田峠墳墓群 2. 佐田谷墳墓群 3. 小和田遺跡 4. 和田原遺跡群 5. 西山遺跡
6. 御神田山遺跡群 7. 永宗遺跡 8. 鍬寄遺跡 9. 広政古墳群 10. 矢崎古墳
11. 瓢山古墳 12. 地王神社古墳 13. 唐櫃古墳 14. 牛塚古墳 15. 陰地古墳群 16. 殿島山古墳
17. 大歳古墳群 18. 山根古墳群 19. 寄藤山古墳群 20. 永末古墳群 21. 柳谷古墳群
22. 篠津原遺跡群

2. 調査の経過

昨年度も述べたように、佐田峠墳墓群周辺は江府三次道路建設にともなう一般国道183号（高道路）のバイパス整備計画の路線地内に含まれていたことから、平成9年度に庄原市教育委員会によって試掘調査が行われた。最初に見つかった3号墓の南東側に方形貼石墓あるいは方形周溝墓かと推測される4・5号墓も確認された。このため、庄原市教育委員会生涯



第2図 平成9年度庄原市教育委員会による試掘調査地点

学習課と広島県庄原土木事務所（当時）の調整協議によって3号墓とその周囲の遺構確認部分（第2図、C区〈石貫・斉藤 2008、26頁、第13図〉）が現状のまま保存されたという経緯がある。

しかし、試掘調査は遺構の有無の緊急確認が最たる目的であった。C区では3号墓の墳丘周囲と、3号墓から南東の尾根上にだけ重機による表土掘削が行なわれた。3号墓の南東側尾根上では幅2m、長さ44mの細長い範囲の表土掘削が行なわれ、遺構の兆候が確認された2地点（3号墓東端から南東へ約20mと40mの両地点）を拡幅して遺構検出のための精査が行なわれた（第2図）。その際に3号墓に近い地点で検出された石列をとまなう方形周溝を4号墓、遠い地点で検出された周溝を5号墓として確認した（第3・4図）。4号墓では、周溝西辺を検出した際に、埋葬施設が遺存している可能性を考慮して周溝内の中央部分だけは重機による掘削を行わず、掘り残したようである。なお、検出した遺構については、おおよその平板測量しか行なう時間はなかったようである。

このため、今回の調査では、庄原市教育委員会の試掘調査の平板測量記録に基づき、3号墓東側周辺の遺構（4・5号墓）の再確認とその詳細な記録の作成を目的とした調査を行なうことを計画した。4号墓を再検出するためにgトレンチ（調査区）、5号墓再検出のためにhトレンチ（調査区〈周溝再検出のためのh-1調査区および、埋葬施設確認のためのh-2調査区〉）を設定した（第5図）。

両調査区（g・h-1調査区）は庄原市教育委員会の試掘調査時に重機掘削された調査区とほぼ重なるように設定し、それぞれ試掘の埋め戻し土を人力で除去したのちに遺構面（試掘掘削停止面）の再検出を行なった。このため、表土あるいはその直下の埋め戻し土からは土器などの遺物は回収されてはいない。

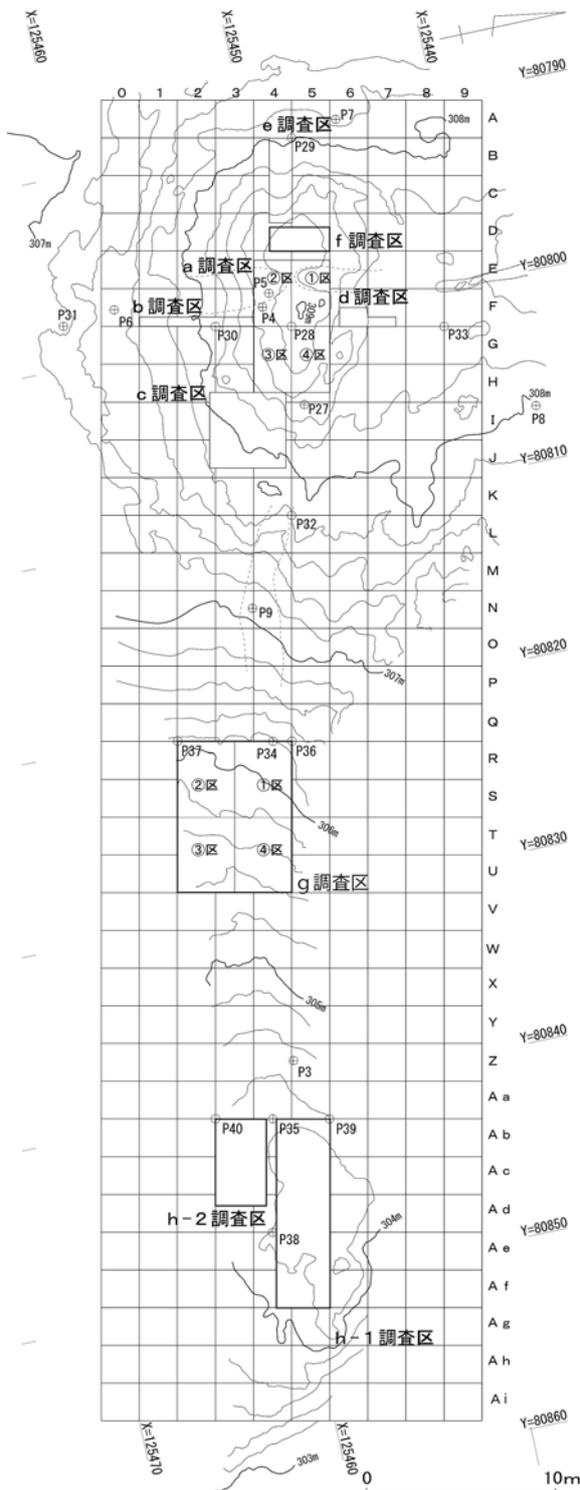
また、昨年度の調査によって、佐田峠3号墓のおおよその規模と墳丘内部の埋葬施設の様相が一部明らかとなったが、3号墓のaトレンチとeトレンチの間隙部分にはまだ、埋葬施設が存在する可能性が捨てきれなかった（野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009、27頁、第3図）。この点を考慮して、今回、fトレンチ（調査区）を設定した（第6図）。以下、f・g・hの各調査区における遺構検出状況とその概要について説明していきたい。



第3図 試掘調査（4号墓検出状況）



第4図 試掘調査（5号墓周溝検出状況）



第5図 調査区(トレンチ)配置図 (1/400)

なお、近隣は檜の植林が行なわれているものの、笹や竹が繁茂しており、表土直下に張り巡らされたその地下茎を夏場に除去するには、多大な労苦が必要となった。考古学実習授業の一環とはいえ、現地発掘調査に参加していただいた学部学生諸氏に感謝したい⁽²⁾。(野島)

3. 3号墓埋葬施設確認の調査 (f 調査区)

3号墓は昨年度に一通りの確認調査を終え、4基の埋葬施設が存在することが判明した(第6図)。試掘時の平板図および、一昨年度の墳丘測量図から3号墓の規模を割り出したが、墳丘の北西-南東方向(以下東西方向とする)の規模を見誤ったことから、墳丘平坦面上、埋葬施設確認のための調査区(aトレンチ)の位置を実際の平坦面の中央よりも東寄りに設定してしまった。その結果、墳丘平坦面の西側に埋葬施設未確認の区域(aトレンチとeトレンチの間隙部分)を生じさせることとなった。このため、aトレンチとeトレンチの間に、東西方向1.6m、南北方向3.3mのfトレンチ(以下、f調査区とする)を設定した。f調査区では4と5の間のグリッド・ラインを基準線とした調査用の畦を設定して、その北側を①区、南側を②区とした。調査用畦の観察を行ないながら、専ら埋葬施設等の遺構検出に努めた。川原石や土器の検出とともに平面図や調査用の畦の壁面図等を作成して、適宜レベル記入等の作業を行なった。

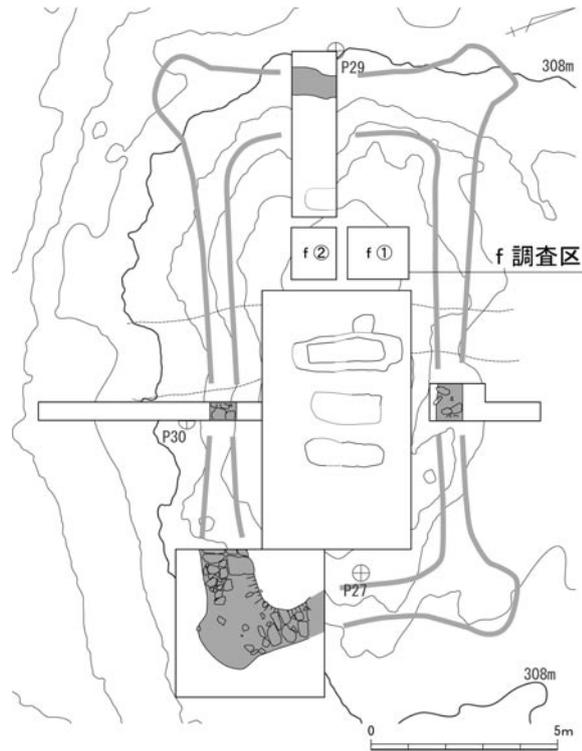
(1) 川原石の検出

表土を除去した段階で第2層上面を検出したが、昨年同様これにともなって河原石が2点出土した(図版第6a)。平面図を作成し、レベル等を記入したのちに除去して、下層を掘

り進めた。

(2) 堆積土層と遺構の有無

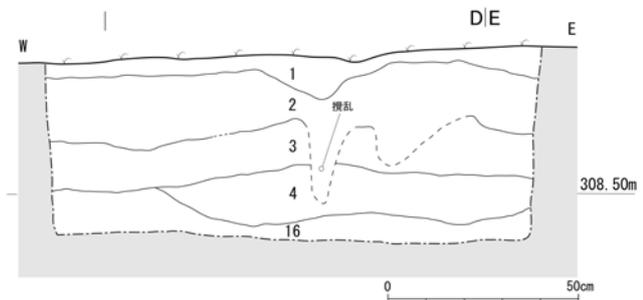
第2層から高坏破片などが出土した(第12図3・4)。昨年度同様に墓壇の検出を予想して、第4層上面、標高308.50m付近での精査を繰り返した。しかし、平面あるいは壁面等の観察の結果、墓壇の確認はできなかった。第4層の堆積下には3号墓西側での地山と想定された第16層が一部平面的に確認されたため、墓壇ST01のように第16層を穿って構築する墓壇などが存在したとは考えられないと結論するにいたった(第7図・図版第6b)。(野島)



第6図 3号墓とf調査区の位置図(1/200)

4. 4号墓確認の調査(g調査区)

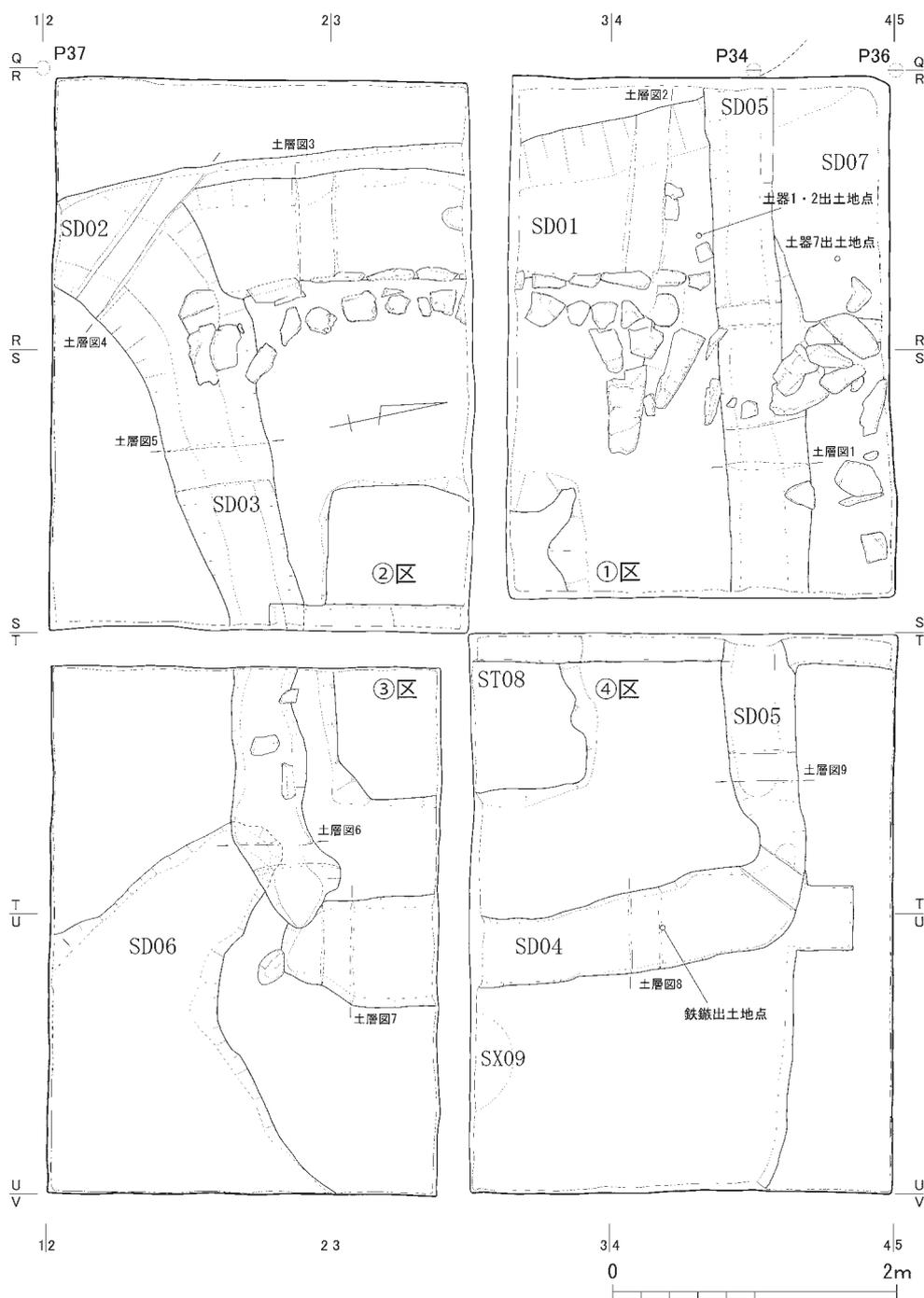
3号墓で使用した調査用グリッド・ラインを東側に延長させて4号墓試掘区画に重複するようにg調査区を設定した。しかし、先述したように平成9年度の試掘調査の記録は簡易な平板図のみであり、平板測量杭の失われた現況では、4号墓の正確な位置を割り出すことは困難で



第7図 f調査区②区北壁土層図(1/20)

あった。このため、試掘区画よりもやや大きめの調査面積が確保できるように、南北6m、東西8m、4と5、QとRの間のグリッド・ラインの交差する点(P.36)を北西隅とするg調査区を設定した。また、g調査区内を南北3m、東西4mの4区画に分割し、北西の区画を①区として反時計周りに②・③・④区とした。また、4分割した区画に沿って土層観察用の十字の畦を設定した。3号墓で設定した基準線(4と5の間のグリッド・ライン〈P.29・P.28・P.32〉)を延長させて、東側尾根上における基準線を設定しようとしたが、実際の調査では、檜の植林樹によってトランシットの視準ができなかったことから、基準線を南側に1m平行移動させて、P.28から東側に22m、42mの地点にP.34、P.35の測量杭を設定した⁽³⁾。

4号墓の遺構面を覆う表土および堆積土は試掘調査後の埋め戻し土であるため、現況写真撮影ののち表土と埋め戻し土を除去する作業にとりかかった(図版第7a・b)。しかし、



第8図 g 調査区4号墓平面図 (1/50)

試掘調査における遺構検出レベルの記録がなかったこと、調査担当者間での試掘埋め戻し土最下層の黒色系排土に関する認識の齟齬や、重機によって埋め戻された硬い黄色系排土層を除去する作業などに手間取ったことから、遺構調査以前の初期作業に多くの時間を割かねばならなかった⁽⁴⁾。

試掘時には周溝内に堆積した埋土は未掘削のまま埋め戻されたことから、試掘による攪乱を受けていないことが予想された。試掘埋め戻し土最下層の掘削を行った後に、周溝の掘削

を開始した。4号墓の墳丘の西側、周溝SD01・SD02などは遺存状況もよく、掘削深が50cmにおよぶ部分もあった(第10図4)。しかし、東側では遺存状況が極めて悪く、掘削深は5cmに満たなかった。周溝埋土掘削中の後半段階になって周溝埋土の土質・色調が一様ではないことが確認されたことから、4号墓周囲で検出された周溝に便宜的な遺構番号を付した。4号墓西側一辺を周溝SD01、南西隅から南側に延びる溝を周溝SD02、南側一辺を周溝SD03、東側一辺を周溝SD04、北側一辺を周溝SD05とした。また、周溝SD03の底面から検出された南東に延びる浅い掘形を周溝SD06として記録した。また、のちに検出したg調査区北西隅、周溝SD01の北側への延長部分(周溝SD05の北側部分)を便宜的に周溝SD07とした(第8図)。

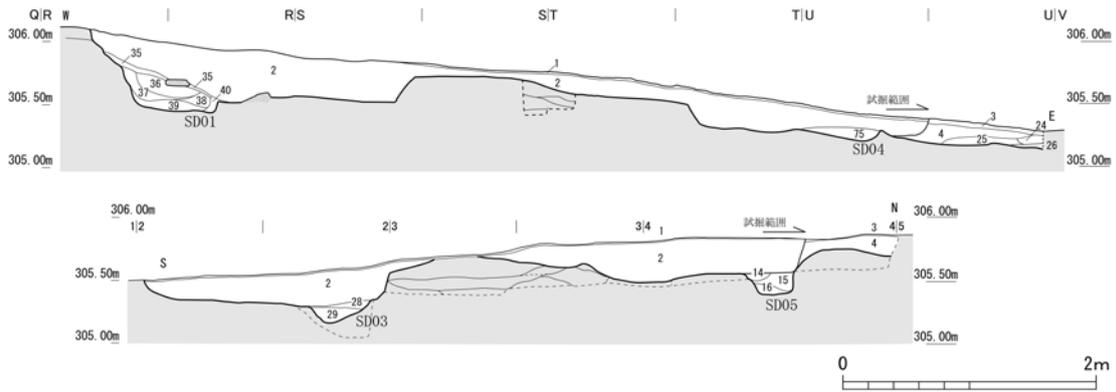
①区南半および②・④区では、周溝埋土と墳丘面の土質の差異は顕著に現れた。時間的な制限もあったことからSD01の掘削を最優先した。SD01埋土掘削開始直後には、SD01北端の第35層(第10図2)から弥生土器(第12図1・2)が出土した(図版第11・13a)。4号墓周溝上層に伴うものとして写真撮影、平面図作成、レベル記入等を行って取り上げた。しかし、SD01とSD05の先後関係を明確にはせずに掘削と記録を継続したため、土器取り上げの際にすぐ北側にある周溝SD05の掘形を破壊し、さらには当初、SD05の埋土をSD01北限の掘形と誤認する状態が続いた(図版第11a・b)。

①区北半と③区における土質の差異は漸移的でやや不明瞭であったことから、遺構検出面上面をさらに精査し、周溝の掘形の検出に努めた。③区では周溝の掘形が明瞭には検出されなかったことから、過掘削の危険性を考慮し、南北方向の調査用十字畦③区西壁に試掘坑を設け土層断面の観察を行った。その結果、非常に浅い掘形を検出し、墳丘を廻る周溝掘形をほぼ推定することができた。また、①区北端および②区南端では、周溝が南北へ延びる可能性が想定できた。そのため土層観察用畦を残し、さらに掘削を行った。②区に残した土層観察用畦から堆積状況を検討した結果、周溝埋土とは不連続の層が認められた(第10図4)。周溝掘削前後に南側に墳丘状の盛土を行なっている可能性が高いものと観察されたことから、4号墓の周溝南側に別の墳丘が存在する可能性が想定された。③区の周溝床面からはグライ化した土層が検出され、墳丘南東斜面にも何らかの浅い遺構が存在した可能性を示すものと考えた。これを4号墓南東に延びる浅い溝(周溝SD06)と想定して調査を行った。南東方向に延びるSD06に対して直交する土層観察用畦を残し、一部を掘り下げたが、下層には確実な遺構掘形の存在は確認できなかった。

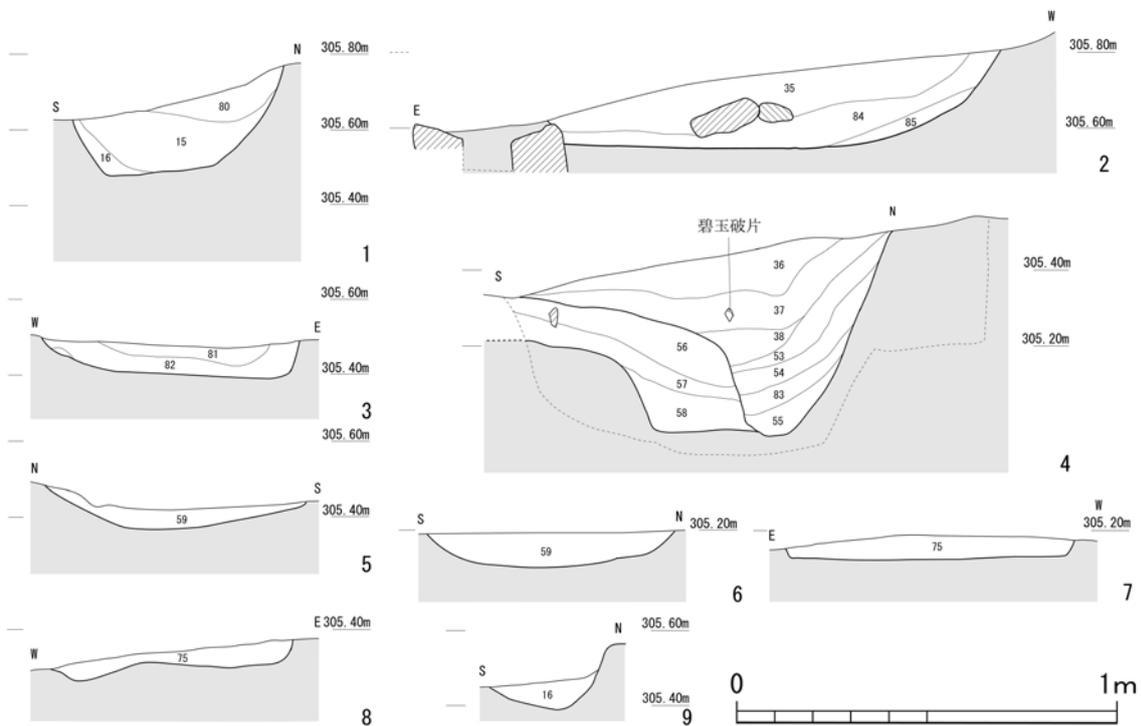
(1) 周溝(第9・10図)

周溝SD01 墳丘西側を南北に走る溝で、幅70~100cm前後となる。周溝のなかでは最も遺存状況の良いものであったため、一部では掘削深30cmとなる。掘形東側には4号墓に伴う石列が検出された。掘形東側斜面に直接的に貼り込まれている状況から、SD01の掘削と石列の設置はほぼ同時期に行なわれたものとみられる。調査用十字畦付近では、埋土の堆積以前に石列の表面に沿って堆積したであろう土層(第40層〈第9図上〉)を検出した。

周溝北端から塩町式土器の甕口縁部および胴部小破片が出土した(第12図1・2、図版第



第9図 g 調査区調査用十字畦壁面土層図 (1/60)



第10図 g 調査区4号墓周溝土層図 (1/20)

11・13 a)。発掘調査の後半段階において後述の周溝 SD05の最終掘削よりも古い時期に埋没したことが判明した。

なお、土層断面図では、第35～39・84・85層の埋土を確認し、その上に第2層が堆積していた（第9図上図・第10図2）。第35層には石列石材等が含まれており、調査用十字畦②区北壁付近では試掘調査における周溝検出時の排土なども若干含まれているものとする。

周溝 SD02 ②区南西隅にあり、南側に行くにつれて、検出面での溝幅を減じるようであった。遺存状況はよく、検出面からの掘削深は50cmである。掘削初期の見解ではSD01の周溝の延長部分と考えていただけであったが、堆積土の観察から、周溝の南側に別の墳丘が築造されていた可能性を想定することができた。第37層から碧玉片が1点出土した（第13図8、図版第13b）。

周溝 SD03 墳丘南側を東西に走る溝で、最大幅は西端で90cm前後となる。東側に行くにつれて遺存状況が悪くなる。一部断割によって墳丘盛土の斜面を利用して溝を形成した状況が確認された。

周溝 SD04 墳丘東側を南北に走る溝である。③区では75cm、④区では50cm前後と、③区と④区では検出面での溝幅が異なる。再確認のため一部断割を行なったが、壁面においてもそれぞれ異なる溝幅の掘形を検出した。おそらく調査用十字畦付近で溝幅に変化があるようである。掘削深は2～5cmと著しく浅い。土層観察用に残した畦（第10図8）からは鉄鍬が出土した（第13図9、第15図）。溝の南端掘形はSD03によって破壊されているように見えたが、掘削深3cm程度なので確実な切り合い関係とは断じ難い。北端側は4号墓墳丘北東隅を廻ってから収束する（図版第10b）。なお溝が北方向へ伸びる可能性も想定し、確認のための断割等を行なったが、溝を延伸した形跡は見られなかった。

周溝 SD05 墳丘北側を東西に走る溝で、検出幅は50cm前後となる。比較的深く掘削されており、狭く深い掘形断面の形状も他の周溝とは異なる（第10図1・図版第10a）。①区では掘削深は60cmになる。調査後半段階になり、SD01埋没後に掘削されたもので、西側はg調査区外へ延伸していることが確認されたが、埋土の土質が他の周溝の黒色土系とは異なり、灰色がかっていたため、再掘削された部分があるのかもしれない。出土遺物はみられなかった。SD05の時期や延伸範囲を確認するために、次年度以降の追加調査を行ないたい。

周溝 SD06 ③区南西隅において確認された周溝で、性格については不明な点が多い。SD03はこの遺構より新しい時期に掘削されていることから、4号墓の南東方向に、それ以前の段階で何らかの遺構が形成されていた可能性を示すものとも考えることもできる。

周溝 SD07 ①区北西にある周溝で、当初、g調査区内で西側掘形が検出されるものと想定していたが、調査後半段階になって北方向へ延伸し、その掘削幅が急速に広がることが判明した。SD01が延伸していった可能性を示している。

（2）石列・貼石（カラー図版第2a・図版第9a・b）

試掘埋め戻し土（第2層）の掘削の最終段階で石列および貼石が確認され、以前の記録写真（第3図）によって一石ごとにその位置等を確認しながら検出を行なった。

原位置を留めている石列・貼石は墳丘西側で認められた。石列は薄手の板状角礫を用いている。ほぼ直線状に配され、西南のコーナー部分ではわずかに墳丘内側にカーブする。貼石は1段目に塊状角礫を、2段目に厚手の板状角礫を石列と並行するように配置している。

先述したように、SD01の東側掘形に直接的に貼り込まれている状況から、SD01の掘削と石列設置はほぼ同時期に行なわれたものとみられる。しかし、調査用の十字畦付近では、埋土の堆積以前に石列の表面に沿って堆積した土層（第40層〈第9図上〉）を検出した。部分的に石列・貼石の上に盛土を行なった可能性も想定できよう。②区南辺では、わずかに石列2石、貼石2石が出土した。このうち石列2石は南側、SD03内に倒れたものと判断した。SD03床面に直接倒れこんでおり、その上に第59層（第10図5）が堆積していることから、周溝掘削からそれほど経ずに石列が南側に倒れたものと考えられる。②区でも2・3段目の貼石

を伴っていた可能性が考えられるが、墳丘検出面直上には試掘の埋め戻し土（第2層）が堆積していたことから、後世に削平されたものと想定したい。

（3）埋葬施設 ST08

墳丘中央に残された墳丘未調査部分を南北方向の調査用十字畦に沿ってサブトレンチを掘削し、墳丘盛土の堆積状況の確認を行なった。東西方向に走る人工的な不整合面を観察することができた。中心方向に落ち込む掘形の可能性もあり、埋葬施設と想定することができる（第8・14図）。現況では、埋葬施設が遺存している可能性が高いものと判断しておきたい。

（4）性格不明土坑 SX09

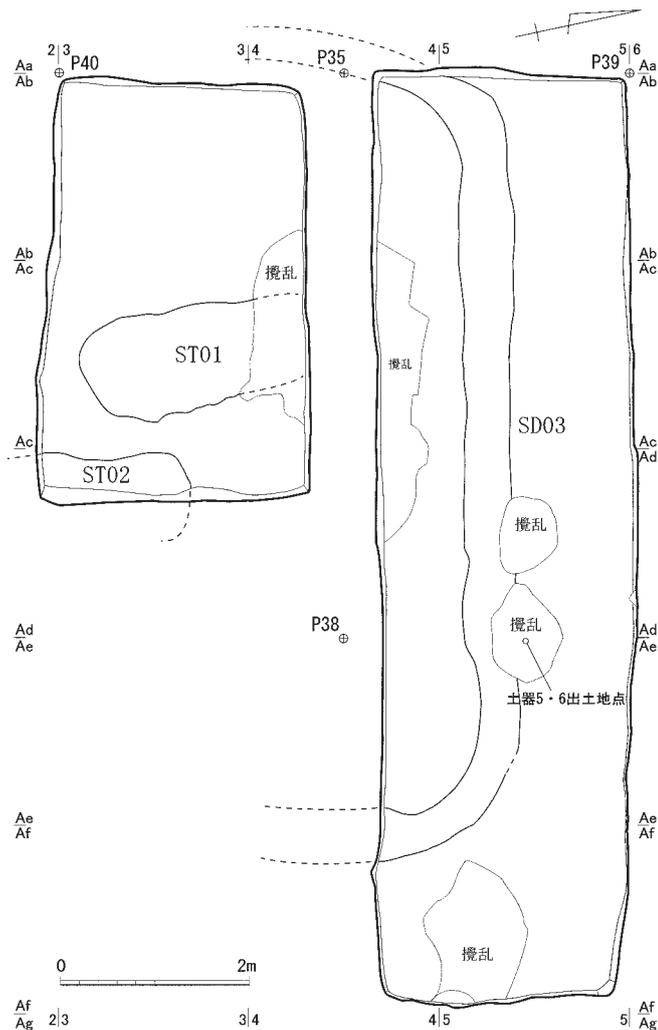
SD04の東側にあり、掘削調査を行ってはいない。そのため性格については不明である。東西方向の土層では埋め戻し土の下層から検出されているが、弥生時代以降の遺構の可能性も残されている。（野島・矢部俊一）

5. 5号墓試掘区確認の調査（h調査区）

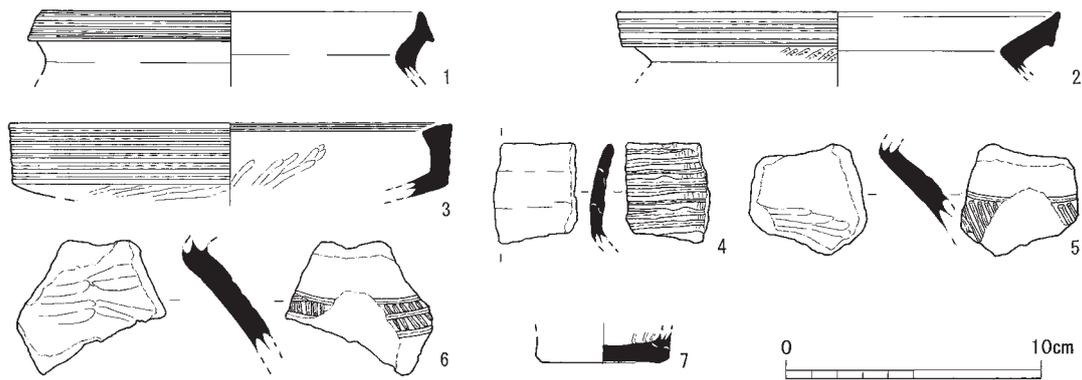
平成9年度の庄原市教育委員会の試掘調査によって既に確認されていた周溝である。5と6の間のライン、A aとA bの間のラインを交差する点（P.39）を北西隅とするh-1調査区（南北2.7m、東西10m）を設定した。h-1調査区は5号墓を検出した際の試掘区画の範囲を覆う調査区であり、重機によって掘削されていた試掘時の埋土を除去し、5号墓の周溝を再検出した。また、その南側には埋葬施設があるものと想定されたため、h-1調査区に平行してその西半にh-2調査区（南北2.8m、東西4.4m）を設定した（第11図）。

（1）周溝（第11図、図版第12a）

周溝はおおよそ8.2m検出され、h-1調査区の東西両端でともに南側に曲がることから、試掘検出部分が北側の一边であることがわかる。検出状況から推測される方形周溝の規模はおおよそ8.5mに達することから、おそらくは一边8m前後の方



第11図 h調査区5号墓平面図（1/80）



第12図 佐田峠墳墓群3・4・5号墓出土土器 (1/3)

形墳丘をもつ大型の周溝墓であった可能性が高いことが判明した（カラー図版第2b）。ただし、南西側は植林等の地形改変によって1.5mほど崖状に一段低くなっており、南西側に想定できる周溝自体は既に削平され、遺存してはいないものと想定される。なお、h-1調査区、周溝の東側に2基の浅い土坑状の不明瞭な円形掘形を検出した。植林された檜の樹列に位置し、内部では檜の根が確認されたことから、これら2基は檜の抜根痕跡と判断した。東側の1基から塩町式土器の壺破片（第12図5・6）が出土した。

(2) 埋葬施設（第11図、図版第12b）

h-1調査区で検出された周溝の南側、周溝内部の墳丘部分にh-2調査区を設定し、表土を小型重機によって掘削し、表土直下から人力による掘り下げを行なった。

土壌 ST01 ST01はh-2調査区の東側で検出した。植林された檜を抜根した際に土壌掘形の輪郭の一部を検出した。このため、遺構の検出面はかなり凸凹にならざるをえなかった。ST01は北側を重機バケットによる攪乱によって破壊されているものの、長軸1.7m以上、短軸1.1mの楕円形の掘形をもつ土壌で、埋土は黒色のクロボクを主体としていた。抜根の際に表土直下から塩町式土器細片が出土した。

土壌 ST02 ST02はh-2調査区の南東端で、長さ1.5m、幅0.4mの範囲を部分的に検出した。埋土は土壌ST01と同様にクロボクを主体としたもので、同様の性格をもつ土壌と考えることができる。いずれも、平面的な確認を行なったが、これ以上の掘削を停止し、再度埋め戻した。（野島）

6. 出土遺物

(1) 土器（第12図、図版第13a）

甕形土器（第12図1・2・7） 1・2はg調査区①区周溝SD01第35層から出土した。1は口縁部分であり、口径15cmに復元できる。頸部は緩やかに外反する。口縁端面はやや内傾し、4条の凹線が廻る。にぶい淡黄褐色を呈し、胎土に細かな石英・長石などの鉱物粒がみられる。2も口縁部である。頸部内面は稜線をもつように屈曲する。口縁端面は外傾し、3条の凹線を持つ。外面はかなり磨耗している。淡黄褐色で、胎土に細かな長石やクサリ礫粒がみ

られた。7はg調査区①区の周溝SD07東端、周溝検出面直下から出土した。甕型土器の底部と考えられるが、胎土は淡黄褐色で磨耗が著しく調整等詳細は不明である。底径は5.3cmである。

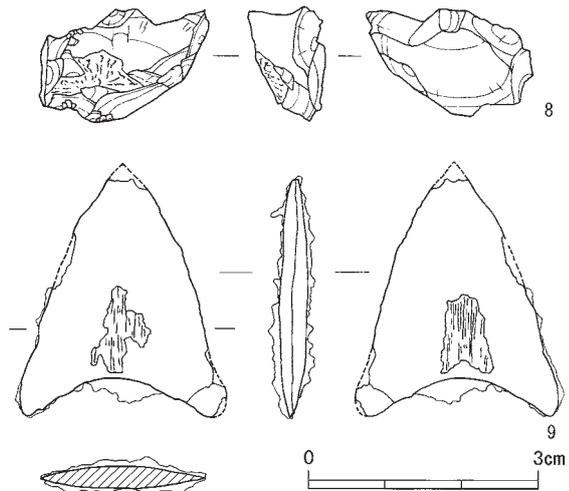
高坏形土器（第12図3） 3はf調査区①区第2層上面から出土した。口径17.7cmに復元できる。側面はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部外面に6条の凹線が廻る。口縁上端を左右に拡張し、その端面に4条の凹線を廻らせている。坏部内外面に斜方向のヘラミガキが認められる。

壺形土器（第12図4～6） 4はf調査区①区第2層から出土した直口壺の口縁破片と思われる。外面は部分的に縦方向の刻目を施した後、8～9条の凹線を巡らせる。焼成は良好で、内面および断面に粘土紐接合痕が確認できる。器壁の厚さは最大で0.6cm、口縁上端から3.3cmの位置に屈曲部分を持つ。胎土の色調はにぶい淡灰褐色を呈し、細かな石英・長石粒や黒色鉍物粒を含む。5・6はともにh-1調査区、5号墓周溝上の植林による攪乱坑2基のうち東側の1基から出土した胴部破片である。5は凹線を廻らせた後、凹線以下に連続した斜線刻目を廻らせる。胎土は淡黄褐色で、1mm前後の石英・長石粒を含む。6は刻目を廻らせた後、その上下両端、および中央に凹線を引く。胎土は淡黄橙色で、1mm前後の石英・長石・黒色鉍物粒を含む。5・6とも内面に横方向のヘラミガキが認められる。

(2) **石片・鉄器**（第13図、図版第13b）

碧玉片（第13図8） g調査区②区周溝SD02調査用畦断面第37層（第10図4）から出土した。長さ1.5cm、幅2.2cm、厚さ1.1cmである。石材は碧玉（珪質緑色岩）で、加工目的のための剥片ではなく、製品を製作した後の残核と考えられる。

鉄 鏃（第13図9） g調査区④区周溝SD04第75層から出土した無茎の三角形鏃である。先端部と逆刺の一部を欠損する



第13図 佐田峠墳墓群4号墓出土石片・鉄器 (1/1)



第14図 4号墓墳丘部北側断割り状況（東上から）



第15図 4号墓周溝SD04鉄鏃出土状況（北上から）

が、鍬身3.3cm、逆刺部幅2.7cm、厚さ0.3cmに復元できる。重量3.5gとなる。根挟みの部分に木質痕跡が確認できる⁽⁵⁾。

(3) 時期的特徴

周溝 SD01で出土した甕型土器は、文様施文や口縁部・頸部形態に若干の差異が認められ、時期幅を持っていることがわかる。5号墓から出土した壺型土器胴部破片は塩町式土器の中でも古い様相の文様(伊藤 2005)を見せ、5号墓から4号墓および近接墓群、そして3号墓を築造するという前後関係を想定することが可能となった。

出土した鉄鍬は佐田峠墳墓群の付近に位置する集落、和田原D地点遺跡住居跡 SB48出土鉄鍬(松井編 1999)に類例が求められる。本遺跡が和田原D遺跡で生活していた人々の墓域であった可能性も指摘できる。中国地方では鉄鍬の副葬が一般化されるのは弥生時代後期末葉になってから、とする会下の見解がある(会下 2003)。今回出土した鉄鍬は周溝からの出土であるが、鉄製品の流通が始まった早い段階に、鉄製品を入手できる状況であったことが想像できる。(矢部)

7. 調査の成果

平成9年度の庄原市教育委員会の試掘調査によって確認されていた佐田峠4・5号墓を再検出した。g調査区で再検出した佐田峠4号墓は最終的には一辺4.5m前後となる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉前後に属する貼石墓として区画されていたことが判明した。石列は西辺を中心に北辺と南辺の一部でしか検出できなかったものの、南辺にも周溝内で板状角礫が散乱していたことから、ある程度石列が巡っていた可能性は高いものと判断した。墳丘裾部に石列を立て並べ、数センチの間隙をおいて墳丘斜面に1～2枚の貼石を行なうといったもので、三次市陣山墳墓群2号墓(落田 1996)など、初期四隅突出型墳丘墓に近い貼石構造を持つことが判明した。

しかし、遺構概要の説明でも触れたように、北辺を区画する周溝 SD05によってほぼ方形に近い形態となっているが、調査の結果、周溝 SD05は4号墓よりも西側に延伸して掘削された区画溝であり、築造当初の4号墓の墳丘はさらに北側に延びていた可能性が高いことが判明した。おそらくは長方形墳丘をもつ可能性が高いことが推測されたわけである。

さらには4号墓を巡る周溝 SD02の断面観察、あるいは周溝 SD06の検出状況から、4号墓の南側に隣接して方形墳丘をもつ周溝墓あるいは貼石墓が存在する可能性が指摘できた。

次に佐田峠5号墓だが、周溝一辺の長さが8mを超えるもので、周溝内の墳丘部分に長軸1.7m以上、短軸1.1mの楕円形の掘形をもつ土壌など、埋葬施設と考える遺構が2基検出された。5号墓の埋葬墓壙と考えられる土壌 ST01上面や周溝攪乱坑から出土した土器細片は塩町式の壺形土器の特徴を持っており、当該遺構が弥生時代中期末葉までに造営された大型の方形周溝墓と想定することができた。

佐田峠5号墓は4号墓とほぼ同時期か、やや遡るもので、3号墓を含めれば前後関係があるものの、方形周溝墓、周溝をもつ方形貼石墓、初期四隅突出型墳丘墓が同一墳墓群内に存

在していたと想定できる。このことから、佐田峠墳墓群は方形周溝墓に貼石を行うことを契機として初期四隅突出型墳丘墓が発展していったことが推測できる重要な遺跡であるといえる。

また、さらには佐田峠墳墓群は、弥生時代後期前半の佐田谷墳墓群に先行する墳墓群であり、両墳墓群からは弥生時代中期後葉から後期前半まで造営され、四隅突出型墳丘墓が成立し、変容していく過程を認めることができる。このことから、庄原・三次地域における四隅突出型墳丘墓が独自に発展した可能性がさらに高くなったといえる。両遺跡は四隅突出型墳丘墓の成立過程を知る上で非常に重要な墳墓群であることが再認識されたといえよう。

なお、4号墓の墳丘および周辺の墳丘墓・周溝墓の有無については今後、さらに調査範囲を広げて確認していくこととしたい。 (野島)

注

- (1) 周辺の遺跡については野島・石貫・小林・辻村・宮岡2009文献を参考にさせていただきたい。
- (2) 調査参加者は以下のとおりである。
 広島大学大学院博士課程前期生：齊藤友紀、矢部俊一
 広島大学学部生：今福拓哉、小川原励、小林 彬、小森由佳利、野村友規、伊川桃子、小林新平、清水麻衣、田頭英尚、伯田桂太、東 麻衣、三浦 晋、水川祐樹
 パリ第4大学（ソルボンヌ）大学院生：グザビエ、ミシェル
- (3) 開放トラバースによる測量で杭打ちを行なったことから、P. 34、P. 35は理論値から南方向に数センチずれている。
- (4) 試掘による埋め戻しの際、遺構の保存も考慮して、墳丘部分に多くの土量の排土を埋め戻したようである。また、埋め戻しは試掘調査区画外にも及んでいたため、墳丘東斜面では表土下に一段階古い表土層が検出された部分がある。
- (5) 鉄鍬実測図は学部3回生の小森由佳利が作成した。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。
- 石貫弘泰・齊藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群（第1次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXII、34～36頁、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室。
- 伊藤 実 2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器—四隅突出の思想とその背景—」野島永・古瀬清秀（編）『考古論集 川越哲志先生退官記念論文集』川越哲志先生退官記念事業会、375～398頁。
- 稲垣寿彦編 1999 『妙見山遺跡』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2000 『広島県史跡 唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2001 『和田原C地点遺跡発掘調査報告書』庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行編 2004 「和田原E地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行 2005 『広島県史跡唐櫃古墳整備事業報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 会下和宏 2003 「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会、49～72頁。
- 落田正弘 1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。

- 尾本原勇人 1996 「宗祐池西遺跡について」『芸備』第25集、51～54頁。
- 尾本原勇人 2000 『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会。
- 桑原隆博 1982a 「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗—国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、31～50頁。
- 桑原隆博 1982b 「西山遺跡」『西山・小和田・永宗—国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、9～30頁。
- 桑原隆博 1986 「四隅突出型方形墓覚書（1）—備後北部を中心として—」『芸備』第17集、1～16頁。
- 桑原隆博 2000 「四隅突出型墳丘墓の出現と展開—備後北部を中心として—」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』大塚初重先生頌寿記念会、713～738頁。
- 沢元保夫 1982 「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗—国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、51～70頁。
- 重松辰治 2007 「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、67～88頁。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会—佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として—」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 妹尾周三 1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。
- 野島 永 2008 「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXII、1～3頁、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田峠墳墓群（第2次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 仁木 聡 2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、21～31頁。
- 藤田広幸 1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 松井和幸編 1999 『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』（財）広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 三次市教育委員会 1980 『宗祐池西遺跡現地説明会資料』。
- 吉川 正 1998 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』第15集、1～20頁。
- 渡辺貞幸 2003 「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
- 渡辺貞幸 2007 「まとめにかえて—四隅突出型墳丘墓概説—」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。

付表1 佐田峠3・4号墓土層観察表

f 調査区3号墓

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	弱	3号墓の盛土に特有の黒ボク・キビ土ブロックの混入が無く、かなり練られた状態になっていることから、再堆積土の可能性が高い。	再堆積土
第3層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	やや弱	径0.1～0.3cm程度のキビ土ブロックを含む（約10%）。	盛土
第4層	黒褐色土	7.5YR 3/1	やや弱	強	径0.5～1.0cm程度の黒ボクブロック（30%）、径1.0～2.0（30%）を含む。この調査区で層がなくなり、墳丘斜面には見られない。	3号墓を覆う封土
第16層	黒色土	10YR 1.7/1	ほぼ無し	やや強	黒ボク土の旧表土層。	地山土

g 調査区4号墓他

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	1次調査終了後の埋め戻しによって形成された層。厳密には後述する3層と異なる。	表土
第2層	浅黄橙色土	7.5YR 8/6	弱	やや強	シルト質土のブロック塊を含む（40%）。1次調査埋め戻し土、部分的に表土が形成される。	攪乱土
第3層	-	-	-	-	未調査部分の表土層。3号墓第1層と同じ。	表土
第4層	褐灰色土	10YR 6/1	弱	弱	もろい砂質土を含む（20%）。	攪乱土
第14層	青灰色土	5B 6/1	強	強	粘質土のグライ土をベースとし、酸化した明褐色のブロックが混じる。	SD05埋土
第15層	褐色土	10YR 4/4	やや強	強	細砂質土をベースとし、褐色の砂粒（1%）、白色の砂粒（1%）を含む。	SD05埋土
第16層	黒褐色土	10YR 3/2	やや強	強	細砂質土をベースとし、白色の砂粒（5%）、キビ土（1%）を含む。	SD05埋土
第24層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや強	強	細砂質土をベースとし、径2mm程の白色ブロックを含む（2%）。	4号墓盛土他流土
第25層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	やや弱	橙色の中粒ブロック（5%）、白色の細砂粒（10%）を含む。	4号墓盛土他流土
第26層	黄褐色土	10YR 5/6	やや強	強	細砂質土をベースとし、一部に黒褐色度が混じる。	4号墓盛土他流土
第28層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや強	強	極細砂質土をベースとし、2mm以下のキビ土（20%）とわずかな炭化物を含む。	SD03埋土
第29層	褐色土	10YR 4/4	やや強	強	極細砂質土をベースとし、径2mm程度のキビ土ブロックを含む（30%）。	SD03埋土
第35層	黒褐色土	10YR 3/1	強	強	極細砂質土をベースとし、キビ土の細粒を含む（5%）。	SD01覆土
第36層	黒褐色土	7.5YR 3/1	強	強	極細砂質土をベースとし、キビ土の中粒を含む（10%）。第16層及び第28層と対応するものか。	SD01埋土
第37層	灰褐色土	7.5YR 5/2	強	強	極細砂質土をベースとし、キビ土の中粒を含む（20%）。	SD01埋土
第38層	にぶい黄橙色土	10YR 6/3	やや強	やや強	細砂質土をベースとし、キビ土の中粒を含む（15%）。4号墓由来の流土で第31層に対応する。	SD01埋土
第39層	灰褐色土	7.5YR 5/2	弱	やや強	細砂質土をベースとし、キビ土ブロックを含む（5%）。	SD01埋土
第40層	褐色土	5YR 6/6	やや強	やや強	極細砂質土をベースとし、細粒の白色ブロックを含む（1%）。列石に関連するものか。	石列置土
第53層	暗灰黄色土	2.5Y 4/2	弱	弱	シルト質土をベースとし、径5mm程度のクサリ礫を含む。第53～55層はSD01もしくはSD03埋土の可能性も考えられる。	SD02埋土
第54層	明黄褐色土	10YR 6/6	やや強	やや強	シルト質土をベースとし、不明瞭なクサリ礫ブロックを含む。	SD02埋土
第55層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	強	弱	黄色・白色のクサリ礫ブロックを含む。	SD02埋土
第56層	褐色土	10YR 4/4	強	強	黄褐色・黒色のクサリ礫が不明瞭に混じる。	隣接墳丘盛土か
第57層	褐色土	10YR 4/6	強	強	灰色・黒色のクサリ礫を含む。黒色のものが多く斑状を呈する。第33層に対応する層か。	隣接墳丘盛土か

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第58層	褐色土	10YR 4/4	強	弱	灰黄色・黒色のクサリ礫が入り込み、第34層に対応する層か。	隣接墳丘盛土か
第59層	黒褐色土	2.5Y 3/1	やや弱	やや強	シルト質土をベースとし、径1mm程度のクサリ礫ブロックを含む。	SD03埋土
第75層	暗灰赤色土	2.5YR 5/2	非常に弱	強	径3mm～10mm程度の明黄褐色クサリ礫が混じり合う。	SD04埋土
第80層	灰オリーブ色土	5Y 5/2	非常に弱	強	シルト質土をベースとするグライ化土で、赤褐色の酸化土を含む。	SD05埋土
第81層	オリーブ黒色土	5Y 3/1	非常に弱	非常に弱い	シルト質土をベースとし、径5mm程度のクサリ礫を含む。	SD01埋土
第82層	褐色土	10YR 4/4	強	やや強	シルト質土をベースとし、径5～10mm程度のクサリ礫ブロックを含む。	SD01埋土
第83層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	強	やや強	径10mm程度までのクサリ礫を含む。	SD01・02埋土
第84層	暗褐色土	10YR 3/3	非常に強	やや強	粘土質土をベースとし、クサリ礫の極小粒が多く含み、小粒の黒色土もみられた。	SD01埋土
第85層	褐色土	10YR 4/4	強	強	極細砂質土をベースとし、黄褐、黒、白色からなる径2mm程度のクサリ礫を15%程度含む。	SD01埋土